

山口県文書館所蔵資料にみえる近世天文関係記事

山崎 一郎

はじめに

令和六年度、当館では、第一九回中国四国地区アーカイブズウィーク（以下AW）のテーマを「天気 気候 自然現象とやまぐちのひとびと」文書館資料から」とし、六月八・九日、閲覧室で「アーカイブズ展示」を行い、展示資料に関する「解説シート」を作成した。

毎年恒例のこの普及事業では、展示資料の選択および「解説シート」作成を専門職員全員で行う。その準備過程で職員は、各自の問題関心に基づいてさまざまな角度からテーマにアプローチし、所蔵資料の垣根（藩政文書、古文書など地域資料、特定歴史公文書、行政資料、写真、古絵はがきなど）を越えて横断的に調べ、展示資料を選び、その「解説シート」を作成する。結果として、当館の所蔵資料がも

つ歴史的な価値、歴史的情報の掘り起こし、理解が進む。「解説シート」はAW後、当館ウェブサイトで公開し広く利用者に提供する。データベース構築により所蔵資料の検索は格段に便利になったが、その定型の記載項目のみでは、各資料の細かい内容までは利用者に伝えきれない（件名目録を整備した一部記録は除く）。特定のテーマにつき、横断的に所蔵資料を調べ、共有データとして蓄積していくことは、館業務の重要な柱である所蔵資料の目録作成、その一環ともなる（所蔵資料に対するテーマ別ガイドの構築作業とでも言えようか）。こうした作業は、データベース整備が進む中でも、必要な業務の一つとしてありつづけられる。

さて、筆者は今年度のテーマに対し、主に当館所蔵資料から江戸時代の天文関係記事を集め紹介した（自然現象、

怪異現象と思しきものも含む)。元文二年(一七三七)から文久二年(一八六二)までの記事を見出すことができ、その成果を「解説シート」の「彗星・流星・日食と文書館資料」(1)～(3)にまとめた。ただし、スペースの都合上、各記事の概要を紹介するに止まらざるをえなかった。そこで、収集した記事全文を本稿で紹介してみたい(補遺も含む)。

江戸時代の天文関係記事は、日々の業務の中で折りに触れ目にする。こうした記事は、数多く集め紹介し、活用されることでより価値が高まる。筆者には天文に関する専門的知識はなく、十分な分析、解説はできないが、右の点を鑑み、今回のAWを機会に、あらためて所蔵資料を調査し記事を集めることを試みた。集めた記事の多くはこれまで紹介(活字化)されていないものである。

調査は、基本的に当館が所蔵する江戸時代の資料(あるいはその写し)を対象とした。ただし、たとえば徳山毛利家文庫など調査できなかった資料群もあり、かかげた記事が所蔵資料にみえるすべてとまではいえない。現時点での中間報告である。紹介にあたっては、多くの方が意味を理解しやすいよう口語訳も記した。知識不足から来る初歩的ミスもあるかもしれない。

江戸時代の天文関係記事は、大崎正次編『近世日本天文史料』(原書房 一九九四年)が網羅的でとても詳しい。江

戸時代の天文現象に関する史料を日食、月食、流星、彗星などの類別にまとめ年代順に紹介し、個々の現象につき解説を付しており、概要を知る上で大変便利である。成稿にあたり同書をガイドとして用いた。また逐一あげないが、近世史料にみえる彗星関係記事は、論文として報告されるほか、全国のアーカイブズ機関、博物館等が展示や館のウェブサイトで紹介する例も多くこれらも参考となる⁽¹⁾。

なお、成稿にあたり、各記事につき、山口県立山口博物館学芸課主査岩村和政氏(天文担当)から多くの助言を受け理解を深めることができた。その主なものを各記事に注記の形で掲載させていただいた。記して感謝いたします。

天文関係記事がある資料の概要

天文関係記事があった資料の概要を、A毛利家文庫・17年表、B日記類、C年代記、Dその他、E館蔵資料以外(刊本史料)に分け簡単に述べておきたい。

A 毛利家文庫・17年表

毛利家文庫・17年表には、主に藩政時代に作成された年表類が集められている(タイトル数は48)。各年表の性格はさまざまで、藩政時代、藩庁が業務の必要から作成したもの、個人が編纂し、経緯は不明ながら、その後毛利家文

庫に伝来したものの、あるいは藩政時代に作成され近代に写されたものなどがある。年表は、作成主体、作成意図により記事に違いがある。藩庁諸役所が作成した年表では、自然現象のうち、農政・民政に直接大きな影響（被害）を与えた大雨（洪水）、大風、大雪、地震などの記事は広く収録されるが、天文関係の記事は、現象が農政・民政に直接影響を及ぼさないためか、網羅的には収録されていない印象をもった。今回4点に天文関係記事を見出すことができた。

①「毛利家年表」（毛利家文庫17年表43）

享保十六（一七三二）〜一八三六の記事載せる。藩主および藩主一族の動向、藩の主要役職者の動向、藩政上の主要事項、藩内での火事、自然災害等の記事を中心とする。全国、江戸での出来事もよく収録されている。巻末に「嘉永三庚戌秋写之 典雅堂秘蔵」とあり、嘉永三年（一八五〇）秋に写したことがわかるが、所蔵元の「典雅堂」が誰かは不明である。表紙に「自享保十六年至天保七年 毛利家年表」との題箋があるものの、これは近代に毛利家の編纂所が貼付したものである。小口に記された「覇城鑑」が原題と思われる。本年表にみえる記事のうち、元文二年正月条は、今回所蔵資料中で確認できたもつと古い彗星記事であった。

【記事】9・12・16・27・34・36・43

②「草舎年表」（同17年表37）

「草舎年表」は、文禄四（一五九四）〜一八四三の記事載せる一五冊からなる（巻四を欠くが、年次は一応つながっている）。草刈泰彦の編纂とされる。彼について、吉田祥朔『近世防長人名辞典』に次のようにある。

草刈泰彦通称は藤次、草の屋と号す、萩藩大組士にして山口湯田に住む、食禄二百石、能く和歌を詠みまた探古の趣味あり、嘗て防長の故事を輯めて草舎年表十六卷の著述あり、筆を上古に起して天保十年に絶つ、この年六十一歳なり、而してその後の事蹟詳ならず。

ここには草刈泰彦が禄高二〇〇石の萩藩大組士とあるが、天保（嘉永頃）の「分限帳」を見る限りその名はない。禄高二五〇石の草刈靱負家（初熊、太郎左衛門、千之助）があるものの、当主名や年齢は一致しない。草刈泰彦についてはまだ検討の余地が残るようである。

巻一卷頭には「干時天保三庚辰夏日 草之舎藤謹而誌之」とあり、次のように記されている。

此書、昔年或家三浦古き事の集しを写し得て、表題なけれはみつから年表と名付け、其外諸家の記録を操り取集て年序を記し、荒々記之もの也

三浦家が所蔵する過去の出来事を書き留めた記録を書き出す機会があり、それに「年表」という題をつけ、さらに諸家の記録も調べ、記事を書き加えて編纂したのが天保三年

(一八三二) のことであつたという。一方、巻十の巻頭には次のようにある。

前部者古家の旧記を探り、今部に至候而者予山口在住ニ而万事聞漏し、前後不同多くして、後見のまとひ有(へし)

巻十は天保四く六年の記事を載せる。巻九までとは異なり、十巻以降(天保四年以降)の記事は、山口に居住する草刈が見聞した出来事を中心にまとめたという。天保三年までと四年以降では記事の性格に違いがあることになる。最終十六巻は、天保十年までは各月の出来事を豊富に載せるが、十一く十四年分の記事はごくわずかである。彼の活動が終わるのがこのころなのであろう。

なお、蔵書印として、「高津蔵書」(朱印) および「草舎」(墨印) がある。

天文現象に関する記事は七つみえる。最も古い記事は元文二年正月条だが、記載は①「毛利家年表」と同文で、同一典拠による記述と思われる。天保六年(一八三五)八月二十三日条のハレー彗星の記事は、天保四年以降の出来事なので、草刈は実際この彗星を目撃したと考えられる。

【記事】10・13・17・28・35・46・49

③ 「年表」(同17年表41)

明応六く安政六年(一四六七く一八五九)までの記事を載

せる。巻末に「大正七年十月児玉愛二郎ヨリ借受謄写之」とあり、「公爵毛利家用達所記録科用」と印字された朱色の野紙に墨(一部朱)で書かれている。大正七年(一九一八)に毛利家の記録科が児玉愛二郎(元長州藩士・宮内省図書頭)から借り受け謄写したことがわかる。原本は幕末期に作成されたものであるが、編者は不明である。原本の形態に関し「原書小形横綴」との注記も残る。

年表の最初、明応六年の記事は毛利元就誕生を記したもので、以下戦国く織豊期の記事はおおむね毛利家の歴史特(に合戦)に関するものである。藩政期以降も藩主毛利家、藩政に関する記事が中心だが、次第に様々な記事が簡潔ながら収録される。天文関係記事が三点あり、うち安政五年(一八五八)八月十九日条はドナチ彗星に関する記事で、これは編者自身が目撃したものと推測される。

【記事】18・26・64

④ 「御家年表」(同17年表46)

『毛利家文庫目録』に「毛利家及び防長両国の諸事件を年別に記載」とあり、明応六く天保七年の記事を収録する。作成・伝来経緯をうかがわせる記述はない。天文関係記事は三点あり、このうち天保六年八月の記事はハレー彗星に関するもので、「八九月、彗星乾方出現、中国洪水」とある。彗星出現が中国での洪水発生という凶事と関連づけ記録さ

れている点が注目される。

【記事】40・42・51

B 日記類

毛利家文庫には萩藩庁諸役所で作成された日記が数多くあり、また、諸家文書にも多様な身分、立場の者が記した近世の日記が多数残る。今回そのすべてに目を通したわけではないが、次の日記に記事を見出すことができた。

⑤ 「密局日乗」(毛利家文庫19日記18)

「密局日乗」は萩藩密用方の業務日記である。明和二丁慶応元年（一七六五）一八六五）分の一二九冊が残る（欠年あり）。密用方は七代藩主重就の時代に新設された。正規の役所として設置されるのは安永三年（一七七四）であるが、密用方初代頭人中山又八郎は、明和元年から密用方に連なる業務を担当し始めており、その時代の日記も含め現在は「密局日乗」として一括して扱われている。

密用方は、藩主や藩重役の指示を受け、先例、毛利家の歴史、家臣の由緒などの調査を行い、特命による記録作成などを担当した。「密局日乗」は、そのような業務に関する内容、密用方役人の動向などを記した業務日記である。ところがこの日記には、業務とは直接関係のない、藩内で見聞きされたふしぎな出来事、自然現象、風聞などの記事が

かなり収録されている。それ自体は主任務ではないが、のちに参考となる可能性を考え、担当役人が意識して記録したものと思われる。そうした中に天体現象に関するものが八つある。享和元年（一八〇二）から天保七年（一八三六）までの記事で、うち二つは目撃した彗星を描いた図が残る。

【記事】32・33・37・38・39・45・50・52

⑥ 「浦日記」(同17藩臣日記2)

「浦日記」は、萩藩寄組士浦鞆負（一七九五〜一八七〇）が文政八〜明治三年（一八二五〜七〇）に書き記した日記である（全六二冊）。浦鞆負は、当職・当役など萩藩重職を務めた人物で、浦家は上関宰判伊保庄阿月（現柳井市）に給領地をもった。「浦日記」は幕末政治史を説明する重要史料として知られる。内容は多岐に及び、武家の生活、陪臣・給領の動向、社会状況などを知る上でも貴重とされる。『山口県史 史料編 幕末維新3』（山口県、二〇〇七年）に安政四年、五年、文久二年、慶応二年分が翻刻されており、「浦日記」の伝来と概要は同書「解説」に詳しい。

文久元年（一八六一）五月二十五日条には、テバット彗星と思われる彗星記事が一つある。また、天保十四年（一八四三）二月一七日条には、夜、西に雲のような「白氣」が見えたといい、その時の図が描かれている。

日記には日食記事が多い。日食の開始時刻、太陽がもつ

とも大きく欠けた時刻、終了時刻、日食の程度などを記録する。ただしこれらは、「伊勢暦」など暦の記載をほぼそのまま転載したようである。浦が実際に日食を見たかは不明だが、日食が大きな関心事であったことはいえる。嘉永五年（一八五二）十一月一日条（官記（62の31））には、この日が日食のため、前例に従い予定の「手子中熨斗之義」を延期し、それを事前に通知したとある。「手子中熨斗之義」の詳細は不明だが、何らかの定例の儀式が日食により延期される場合があったことが知られる。

【記事】55・67／（日食）54・56・57・58・59・60・62・68

⑦ 渡辺諄「日記」（隅家文書8・11・12）

渡辺新七（諄）は、萩藩の下級藩士（無給通・身柄一代遠近付）であった。安政二年（一八五五）の分限帳によれば、禄高二七石一升六合、三才である。居宅は熊毛宰判塩田村（現光市塩田）にあったが、勤務のため萩・山口に居住する期間も長く、また世子毛利元徳の御供を命じられ、江戸、京、大坂に出向くこともたびたびあった。

彼は嘉永四年（一八五二）から明治二十八年（一八九五）までの日記を残している。このうち幕末期の日記三冊に彗星に関する記事を発見できた。注目すべきは、いずれにも目撃した彗星の図を書き残している点である。安政五年八月、文久元年（一八六一）五月、同二年八月と短期間に三度も

彗星を目撃した渡辺は、時代が大きく変わる予兆としてこれらを捉えたのではなからうか。

【記事】63・66・69

⑧ 「有武日記」（多賀社文庫1202・151203・6）

大内氏によって勧請されたと伝える山口五社の一つ、多賀神社の大宮司高橋有武の日記である。文政六年（一八二三）から天保十年（一八三九）までの一二冊が残る。『山口市史料編 近世1』（山口市 二〇〇八年）に文政二〜天保二年份が翻刻されている。同書「史料解題」は、本史料につき、「山口を中心に、領内諸所における市井のできごとがさまざま記載」されており、「都市社会史研究のうえで貴重であるばかりでなく、民衆意識や政治意識などまでうかがうことができる」ものと評価する。日記には彗星関係の記事が五つある。その中には、彗星の出現を戦乱や吉事と関連づけた記述がみえる（43・47）。

【記事】41・44・47・48・53

C 年代記

⑨ 「元文後記」（多賀社文庫1197）

多賀社文庫は、多賀神社の大宮司家高橋家で形成された文書群である。「元文後記」はその中に残る年代記で、元文二〜宝暦十三年（一七三七〜六三）のさまざまな出来事を

記録する。多賀社の蔵書印があり、同宮司家で作成されたものである。内容は、藩主および藩主一族の動向、藩重役の任免記事のほか、山口周辺を中心に藩内寺社の祭礼、開帳、普請の記事が豊富にみえる。自然現象、火災、病気の流行などの記事もある。この中に彗星の記事、日食の記事がみえる。

なお、多賀社文庫には同様の年代記「安永後記」（多賀社文庫1198）もある。安永三〜天明元年（一七七四〜八一）の記事を収録するが、これには天文関係記事は見当たらなかった。

【記事】20・21・23

⑩ 「宝暦後記」（安部家文書¹³⁸）

江戸時代、山口町の大年寄役を勤め、屋敷が本陣として使用されるなど、町を代表する町人であった安部家の文書に残る年代記である。宝暦十四〜安永二年（一七六四〜七三）のさまざまな出来事を記録する。山口町およびその周辺諸村の出来事として、寺社関係記事（祭礼、開帳、普請など）、芝居など芸能関係記事、災害関係の記事など多様な内容が収録される。表紙には「有吉氏」とある。本記録は安部家で作成したものではなく、有吉家に伝来したものが安部家に渡り（借用か）、そのまま安部家に伝来したのではないかと推測される。内容的には多賀社文庫「元文後記」

「安永後記」に近く、時代的にもその間をつなぐものである。全文が『山口市史 史料編 近世1』に翻刻されている。この記録には天文関係記事が五つみえる。

【記事】24・25・29・30・31

⑪ 「異録」（柳井市金屋小田家文書⁹⁰⁹）

岩国藩の商都柳井津町の有力町人であり、江戸時代後期には勤功により藩士に取り立てられた小田家に伝来した文書の中に残る。嘉永三〜安政元年（一八五〇〜五四）の柳井津ほか各地での出来事、大風、洪水、大地震等の自然災害、ペリー来航、將軍薨御、近隣神社の祭礼など様々な記事がみえる。その中に嘉永六年（一八五三）七月下旬、柳井津で目撃された彗星の記事があり、その図も描かれている。

【記事】61

D その他

⑫ 「風説書写」（宇野家文書¹²）

江戸時代、萩藩熊毛宰判下久原村（現岩国市）に居を構え、幕末に近隣諸村の庄屋を務めた宇野家に残された文書「風説書写」の中に、安政五年（一八五八）八月、ドナチ彗星を観測した時のようすが記されている。ドナチ彗星はとても大きな彗星であった。当時七九才の記主（名前の記載無）は、「これまで自分は三回『掃木星（ほうき星）』を見

たことがあるが、今回のような大きなものは初めて見た」とその大きさに驚き、「古今の『珍星』だと世間で評判にしている」とも記す。十八世紀後期〜十九世紀中期を生きた人物が、生涯三回彗星を見たと述べているのも興味深い。

【記事】65

⑬ 「彗星之説」(内田家文書和漢174)

江戸時代後半、萩藩小郡宰判台道村(現防府市)の庄屋を務めた内田家の文書に残るもの。年欠(幕末カ)で記主も記されていないが、その内容は、「去ル七月」、戊亥(西北)の方角に毎夜現れた「木曜星」を「豊年の吉星」とする考えを述べたものである。

記主は、この星を「ほうき星」と呼んだり、「悪星」とみなすことは間違いだとし、昔、陰陽師安倍清明の時代のエピソードを紹介する。かつてこの星が出現した際、人々が「悪星が出た」と嘆くと、清明はそれを否定し、これは「吉星」であり、「この星を信じ、祭り奉るものは『大福長者』になること間違いない」、「大吉星である」と力説したという。また、戊亥の方角に向け、星に五穀(米・粟・稗・大豆・小豆)を捧げると良いこと、また、この星が出現する間は年々豊作で、特に火難・水難を逃れ、厄年にも少しも祟りがない、という話を紹介する。

古来、彗星の出現は、凶兆(不吉なこと)のまえぶれと

捉えられることも多いが、一方でこのように吉事として理解されることもあった。吉凶いずれにせよ、ひとびとが彗星出現を天からの何らかのメッセージと理解しようとしていたことがよくわかる。

【記事】70

E 館蔵資料以外(刊本史料)

今回は、基本的に館蔵資料を調査対象とした。その結果、意外に一七世紀の記事が少なかつたことから、その欠を補うため、活字化されている以下の二点にも調査範囲を広げ記事を探してみた。

⑭ 『日野氏録誌』(山口県史民俗部会報告書第一号一九九四年)

周防国玖珂郡本郷村(現岩国市)の品秀寺の住職日野氏が記録した年代記。元禄九〜延享三年(一六九六〜一七四六)のさまざまな出来事を収録する。原本は品秀寺蔵。報告書の解題では「現在の山代地方を歴史、民俗から総合的に理解するための貴重な資料」、「侍や役人でなく、現地の庶民が残した生の記録という意味でも、近世の庶民生活を知ることのできる貴重な記録」と紹介する。この記録には、一七世紀末から一八世紀前期における天文現象に係る記事がみえる。

【記事】3・5・6・7・8・15

⑮ 『岩邑年代記』(岩国徴古館刊 一九八四〜一九九年)

「岩邑年代記」は、「岩国藩史の年表」あるいは「岩国藩の年代記」と評される。慶長五〜文久四年(元治元年・一六〇〇〜一八六四)を対象に、岩国周辺でのさまざまな出来事を書き留めた記録である。岩国徴古館に六部が保存されており、同館によって『岩邑年代記』(一)〜(十)が刊行されている(『岩邑年代記』凡例)。一七〜一八世紀前半の天文関係記事を補うため、『岩邑年代記』(一)〜(三)を調査対象とし、七つの記事を確認できた。そのうち本稿には、長文記事を除く五つを掲載した。本書に収録される延宝八年(一六八〇)の記事が今回の調査で確認できたものとも古いものであった。

【記事】 1・2・4・11・14・19・22

註

(1) 今年度も埼玉県立文書館が企画展「天体観測―歴史のなかの星と人びと―」を開催している(未見)。なお、山口県立山口博物館が所蔵する天文学関係資料については、松尾厚「山口博物館収蔵の天文学史関連資料Ⅰ 資料紹介」(『山口県立山口博物館研究紀要』第29号 二〇〇三年)。

(2) 密用方については、拙稿「萩藩密用方と中山又八郎の活動について―藩主重就期における密用方設置前後の動向」(『山口県文書館研究紀要』(以下『紀要』)第38号 二〇一一年)、「寛

政く文化期前半における萩藩密用方について」(『紀要』第39号 二〇一二年)、「萩藩御宝蔵と密用方」(『紀要』第44号 二〇一七年)、「丙辰丸の図と幕末期萩藩密用方」(『紀要』第45号 二〇一八年)。

(3) 多賀社文庫の性格、形成過程等については重田香澄の一連の研究、「近世多賀社文庫の目録二種について―校割帳改と近世書籍目録」(『紀要』第47号 二〇二〇年)、「近世多賀社における校割帳改について―県庁伝来旧藩記録『山口多賀大神宮御文庫書目』の分析をとおして」(『紀要』第49号 二〇二二年)、「文政期における多賀社文庫の拡充と管理―『山口多賀大神宮御文庫書目』の検討から」(『紀要』第50号 二〇二三年)参照。

○山口県文書館所蔵資料にみえる近世天文関係記事

〔凡例〕

- ・年／出典／史料／口語訳／*（注記の順に掲げた。
- ・年月日は資料の表記を示した（このため西暦とのズレがある）。
- ・出典に付した○番号は、前掲「天文関係記事がある資料の概要」での番号に対応する。
- ・史料は9p太字で示し、冒頭に通番1〜70を付した。
- ・史料に続けて口語訳を8pで示した。
- ・*（注記）には、『近世日本天文史料』『天文と略記』より、該当すると思われる彗星がある場合その記事を引用した。また、各記事に関し、山口博物館岩村和政氏から助言を受けた内容を掲載し、これらについては倉岩村と注記した。

延宝八年（一六八〇）

⑮『岩邑年代記』（一）130頁

1一、十月十五日、**珍星**出る

十月十五日、空に「珍星」が現れた。

*『天文』九月二十三日条に「大彗星、西南に出現、尾半天に及ぶ、

十二月上旬に消滅」とある一六八〇年彗星（キルヒ彗星）か。

*十七世紀の大彗星のひとつ。（倉岩村）

天和二年（一六八二）

⑮『岩邑年代記』（一）134頁

2一、二月廿二日夜、**光り物**、**諸国同前**

二月二十二日夜、（空に）光るものが見えた。諸国も同様であった。

*流れ星でも特に明るい火球か。（倉岩村）

元禄九年（一六九六）

⑭『日野氏録誌』

3同二月二**旗星**出ル

二月、「旗星」が現れた。

宝永四年（一七〇七）

⑮『岩邑年代記』（一）55頁

4一、三月十三日、**髭ふる**、**鹿の毛のごとし**

三月十三日、（空から）ヒゲがふつてきた。鹿の毛のようであった。

*火山噴出物の「ペレの毛」の可能性がある。記事6も同じ。（倉岩村）

⑭『日野氏録誌』

5同十一月二**ノ夜**、**旗星**出ル

十一月二日夜、「旗星」が現れた。

宝永五年（一七〇八）

⑭『日野氏録誌』

6同五年四月朔日三**天ヨリヒゲ**降ル。白赤ノ**二色**、**長サ壹寸四五**歩アリ

宝永五年四月一日に空からヒゲ（のよなもの）が降ってきた。白赤二色で長さは一寸四、五歩ほどであった。

7 同三月廿三日、天二日輪二ツ出ルト云フ。朝五ツ時分

同年三月二十三日、空に日輪が二つ出たという。朝五ツ頃（午前八時頃）のことであった。

*ハロ（日暈。太陽や月の光が水晶で屈折して生まれる光の現象）か。（金村）

享保十七年（一七三二）

⑭『日野氏録誌』

8 同七月十五日（十五夜）夜ノ日、四ツ過ぎニ月ニ輪出来ル事、月ノ暈ノ如シ、月ノ輪ノ中ニ火焰充滿ス、其火焰ノ中ニ三ツノ悪丸、カゼアリテ燃ル事、不動明王ノ後光ノ如シ、煙草半服呑ム間ダナリ、是レヲ踊リ子能クミル事不思議ナリシ事トモノナリ、是偏ニ田方ノ稻ノ焦枯ル、瑞相ナラシ。

七月十五日夜、四ツ過（午後十時過ぎ）に月に輪がかかる現象が見えた。月の暈のようであった。月の輪の中に炎が充滿し、その炎の中に三つの丸（黒丸）がみえ、風でその炎が燃える様子は、あたかも不動明王の後光のようであった。それは煙草を半服吸う間の出来事だった。この現象を（この日の盆踊りでの）踊り子がよく見ることは不思議なことである。これはきつと田の稲枯れの前兆であろう。*月の周辺に現れたハロ（月暈）や幻月などの現象か。（金村）

元文二年（一七三七）

①『毛利家年表』

9 正月、彗星西方ニ出ル

正月、彗星が西の空に現れた。

②『草舎年表』五

10 正月、彗星西方ニ出ル

⑬『岩邑年代記』(二) 5頁

11 一、正月中旬、彗星西方に出

*『天文』正月四日条に「彗星出現」、同じく八日条に「彗星、西南に出現、下旬に至る」とある。一七三七年第一彗星（フラッドリ）
一彗星か。

寛保二年（一七四二）

①『毛利家年表』

12 正月、彗星見

②『草舎年表』五

13 正月、彗星見六、河鼓

正月、彗星が見えた。河鼓（中国の星座）の方角であった。

⑮『岩邑年代記』(二) 55頁

14（同年正月条に彗星の記事あり。省略）

*『天文』正月二十二日条に「彗星、東北に出現、長さ三尺、二月

に及ぶ」とある一七四二年彗星か。

*『天文』掲載の「紫之園漫筆」に「正月、彗星見 於河鼓南及河鼓」とあり。

寛保三年（一七四三）

⑭『日野氏録誌』

15 寛保三癸亥十一月中旬ヨリ、西アガリノ方ニ光リヲ引星出ル、宵ノ五ツ時分迄ニ入、其引光目渡シ十四五間ニモ見エ、不思議ト沙汰ス、世間ニハ帯キ星ト云ヘリ、秋ヨリ御芳書ニハ客星ト云ヘリ、翌年正月六日迄アリ、七日晝ヨリハ光リバカリアリ、ハヤ宵ノ程山端ニ入、ミヘズ、是翌年正月月中旬ニ九州ヘクダル事フレ申ハ、市ヨリ戌亥ニアタリ乱ノ元ト、又歌ニ、
彼星ヲ

皆人ガ 帯キ星トハアヤマリヨ

秋田ノ稲ヲタバネ〔乙〕シ星ト

彼星タバネ熨斗ノ如クナレバナリ

寛保三年十二月中旬より、西の空の高い位置に光を引く星が現れた。宵の五ツ時（午後八時）までに地平に隠れた。星が引く光は、目渡し一四、五間もの長さに見え、不思議なことだと皆が語り合った。世間ではこれをほうき星と言った。秋からの文書には「客星」と記してあった。翌年正月六日まで見えた。七日の晝には光だけが見え、宵のころには山の端に入り見えなくなった。翌年の正月中旬には（星が）九州方面に下っていくとうわさが広がると（九州方面は）

市（本郷市カ）より戌亥の方向にあたるので、（この星の出現は）乱の元になるだろう（とひとびとが語りあった）。また、この星を歌に詠んで、

この星をひとびとが「ほうき星」と言うのは誤りである、秋の田の稲を束ねる星というべきである。それはこの星が「束熨斗（たばねのし）」のような姿をしているからである。

*「是翌年正月」以下はかなり言葉を補い解釈している。

①「毛利家年表」

16 十一月、彗星見 千東国到来 子正月諸国見之

（延享元年）

十一月、彗星が見えた。（まず）東国で目撃された。子（延享元年）正月には諸国で目撃された。

②「草舎年表 五」

17 十一月、彗星見テ東壁ニ至来 正月日本国見之

十一月、彗星が見えた。（まず）東の空で目撃された。（延享元年）正月には日本全国で目撃された。

③「年表」月の記載は無し

18 珍星出

⑮「岩島年代記」二二 96～98頁

19（延享元年条に「異星出現の事」として寛保三年彗星に関する長文の記事あり。省略）

* 15～19は『天文』十月十日条に「大彗星西方に出現、尾長く翌年正月に及ぶ」とある一七四四年彗星クリンケンベル彗星か。

延享元年(一七四四)

⑨『元文後記』

(延享二年)

20 八月・九月比方はき星出現 丑年正月七日迄

八月・九月頃からほうき星が現れた。翌年正月七日までみえた。

*『天文』延享元年六月条に「客星、心・尾宿の間に出現」、同二年 正月上旬に「煙の如く光る怪星、西に出現、四月に及ぶ」とある。

延享四年(一七四七)

⑨『元文後記』

21 七月廿七日、夜五ツ時、火玉飛

七月二十七日、夜五ツ時(午後八時頃)、空に火の玉が飛んだ。

寛延元年(一七四八)

⑮『岩倉年代記』(三)

22 一、八月廿九日夜、火玉ぬけ候事

八月二十九日夜(空に)火玉が飛んだ。

宝暦十三年(一七六三)

⑨『元文後記』

23 九月朔日朝五ツ時、日食有之、六、七歩計、曆ニハ見へ不申

候事

九月一日朝五ツ時(午前八時頃)日食があった。食甚は六、七歩ほどであった。曆には記されていない日食だった。

*西暦一七六三年十月七日。倉君村

明和元年(一七六四)

⑩『宝暦後記』

24 十一月、日輪於京都ニツ出現之由、大坂にてハツツ出現

十一月、京都で日輪が三つ現れた。大坂では二つであった。

*太陽周辺に現れたハロやアークの類か。倉君村

明和六年(一七六九)

⑩『宝暦後記』

25 七月比方はき星出現相成候、東方方出始めて、尙間計と見へ

申候所ニ、後程長く相成、夜中八ツ時を明方迄見へ申候、後程おそく出現、其事も七月廿六日見初申候、八月廿三日比方見へ不申候事、或曰、いな星、五穀星、軍星など色々御噂申候事

九月初方日本国中風気はやり申候

十月中比方西天に又はき星出現有之、暮六ツ時方五ツ時迄

十月末より八見へ不申候

七月頃よりほうき星が現れた。東の方から出始め、(最初、その尾の長さは)一間ばかりに見えていたが、後になるほど(尾の長さは)長くなった。某(記主)も七月二十六日に初めてこのほうき星を見た。

八月十二、二十三日頃から見えなくなった。この星のことを人々は、「稲星」、「五穀星」、「軍星」など、いろいろと噂しあった。

九月初め頃から日本国中で風邪が流行した。

十月中旬ごろから西の空にふたたびほうき星が現れた。暮れ六つ

(午後六時) から五つ時(午後八時) 頃まで見え、十月末には見えなくなつた。

③「年表」／本年八月と九月の間の条文

26 彗星出ル

①「毛利年表」

27 秋、彗星見

②「草舎年表」五

28 初秋、彗星見

* 25〜28は、『天文』六月条に「大彗星、六月中旬より出現、尾長さ數十度、八月上旬に及ぶ」とある一七六九年彗星か。

明和七年(一七七〇)

⑩「宝曆後記」

(目気、鬚の意也)

29 六月初旬異星出現、或曰、其形如眼氣といへり、趣ハ不知星ノまはり月の笠の如く、おほろ月の如し、六月十二日迄鑑ニ拝見せしニ、十三日四日比方ハ夜ふけ人しつまりて、八つ七つ時分北ノ方へ見へ申候、出仕舞之夜も北ノ方ニ出現、十五六日比方ハ出現無之、

六月十三日、星東6月の輪江近寄候様見へ申候所ニ、五つ過二輪之内江入、頓而西方江出現相成、不思議之事ニて有之

六月初めより空に異星が現れた。その形はまげ(鬚) ようであったともいうが、意味はよく分らない。星の回りは月に笠がかかったよう、あたかもおぼろ月ようであった。六月十二日まではたしかに見え、十三、四日頃からは、夜更け、人々が寝静まった八ツ、七ツ(午前了四時頃) に北の空に見えた。最後に見えた夜も北の空であった。十五、六日ころには見えなかつた。六月十三日、星は東から月の輪に近寄るように見えていたが、五ツ過ぎ(午後八時過ぎ) に輪の中に入り、やがて西の空に現れた。不思議なことである。

* 『天文』六月二日条に「大彗星、北天に出現」とある一七七〇年第一彗星(レクセル彗星) か。

安永元年(一七七二)

⑩「宝曆後記」

(目気、明和七年)

(委細)

30 七月比方異星出現、形眼氣、寅年六月比出現、いさひ前記、当年一二月比、異星出現趣江戸を申来、北方ニ出現、夜中七ツ時分と申事ニ候、殊之外善星成由、丑卯巳未酉五人之者祭りて大に吉事と申来候事

七月頃から異星が出現した。鬚のような形であった。明和七年六月頃に現れた異星については詳しいことを前に記した。当年の二、三月頃、異星が現れるという話が江戸から伝わってきた。北の空に夜中七ツ頃(午前四時頃) に現れるという。(この星は) ことのほか「善星」(良いことの前兆を示す星) とのことである。丑・卯・巳・

未・酉年(の生まれ)の五人がこの星を祀ると大いに吉事となると
いうことである。

*『天文』にはこの年の彗星記事なし。

*西暦一七七二年三月八日発見のビエラ彗星か。(倉君村)

安永二年(一七七三)

①「宝曆後記」

31 八月比方異星出現、如眼氣と有之分、寅年ノ六月出現、辰七八
月比出現、又此度以上三度

八月頃に異星が現れた。鬚のような形の異星が明和七年六月に現れ、
安永元年七、八月にも出現し、今回が三度目であった。

享和元年(一八〇二)

⑤「密曆日乗」一月四日条

32 一、今夜、星月ヲ貫ク、月光常ニ変リ、暫シテ星スリ違ヒ候

今夜、星が月を貫いた(月を横切ったようにみえた)。月光が通常とは
異なってみえ、しばらくして星と月がすれ違った。

*西暦一八〇二年三月十八日の金星食。(倉君村)

文化四年(一八〇七)

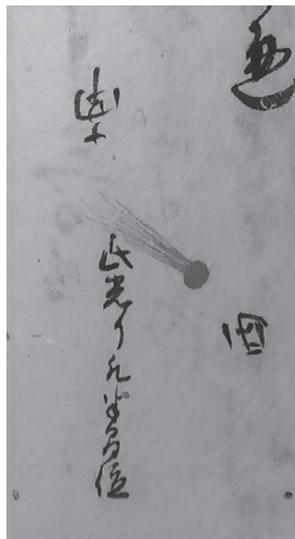
⑤「密曆日乗」九月四日条

33 一、此内々申ノ方ニ当、暮過ル異星頭、五ツ時頃西ノ方

へ入、彗星或縮星、形凡左之通

南
西
【図】

此光り凡半間位



このころ、申の方角に暮過ぎから異星が現れた。五つ時(午後八時)
頃から西の方角に進んだ。彗星あるいは縮星という。形は左の図の
ようであった。

(彗星の尾の)光の長さは半間(約90cm)ほどであった。

①「毛利家年表」

34 八九月、彗星西方出

八く九月、西の空に彗星が現れた。

* 33・34は『天文』八月十一日条に「彗星、西天に出現、南を指
す、九月に及ぶ」とある(一八〇七年彗星(シヨパンニ彗星(倉君村)
か。

文化八年(一八二二)

②「草舎年表」七、八月条

35 全月上旬より西北ニ当り流れ星出る、少し引き有之、俗説稲星と云ふ

八月上旬より西北の空に流れ星が現れた。少し光の尾を引いていた。俗説に稲星とも呼ぶ。

①「毛利家年表」

36 八月二日、彗星、北斗ヲ貫出

八月二日、彗星が北斗七星の辺りを横切った。

* 35・36 は、『天文』七月二十三日条に「大彗星、北斗の近くに出現、紫微垣、大微垣の間を犯す、長さ七尺、十月に至りて消滅す」とある一八二二年第一彗星(フラウゲルギュウス彗星)か。

文政二年(一八一九)

⑤「密局日乗」五月二十三日条

37 一、此頃、萩御城方少シ北之方江寄り、乾之方角江当り翠星現ル、或分之云、星彩青して兵乱之兆に非ず、吉事也と云ふ

このころ、萩城より少し北の方角へ寄った位置、乾の方角にあたる空に彗星が現れた。ある説には、この星の色は青く、兵乱の前兆ではない。吉事を示すものだという。

* 『天文』五月二十六日条に「大彗星西北に出現、八月十一日曉東天に見ゆ」とある一八一九年第一彗星(トラレス彗星(倉村)か)。

文政四年(一八二二)

⑤「密局日乗」四月二十五日条

38 一、此節丑之時頃、東之方江光りを引候星出候由
このころ丑時(午前二時)頃に東の空に光を引く星が現れたという。

文政八年(一八二五)

⑤「密局日乗」六月二十九日条

39 一、此節大白星、白昼ニ顯レ、日月星一同ニ見ゆ

このころ「大白星」が白昼に現れ、太陽と月と星が一同に見えた。
* 金星か。西暦一八二五年七月二十九日(旧暦六月十四日)が西方最大離角で、日中でも金星が見えやすい時期。(倉村)。

④「御家年表」

40 八月、彗星出ル

八月に彗星が現れた。
八月の夜に明けの明星が三つ現れた。

⑧「有武日記」八月条(二十一日)

41 一、ほゞきほし、西の下剋より辰「」方に見え申候、廿一日の夜子ノ剋、芸州諸方にて船より見申候、稲星とも申、鳳陽いわく、今年ハ長雨ふりたるゆへ、水気のこり候て五行の気天ニ移り、ほゞきほしの如く見え候へとも、かな「」ほゞき星にてハなし、星ハもと墜キもの也、五行の気「」たるゆへ、跡を引候付、ほゞき星の如くハ見え候、年「」

のよしあしによる事にてはなしと云へり

ほうき星が西の下一刻(午後七時頃)から辰^一」の方向に見えた。八月二十一日夜、子の刻(午前〇時頃)、安芸国の所々で船からこの星が見えた。稲星ともいふ。学者上田鳳陽が言うには、今年は長雨が降ったので水気が残り、五行の気が天に移り、(その結果)ほうき星のように見えたものであり、これは必ずしもほうき星ではない。星は本来堅いものである。(今回見えたのは)五行の気が移ったものに過ぎず、光りの尾を引いたので、ほうき星のように見えたのである。年の(吉凶などの)よし悪しを示すものではない、という。
*『天文』八月一日条に「大彗星、昴宿・畢宿の間に出現、九月末に及ぶ」とある。一八二五年第四彗星(ボーンボンス彗星(倉岩村)か。

天保二年(一八三二)

④「御家年表」

42 正月十七日、西方珍星出、又銀雲如人形

三月廿九日、有明光物、

四月六日、日輪三ツ出

正月十七日西の空に珍星が現れた。銀色の雲が人の形のようにだった。三月二十九日、有明の頃、空に光り物が現れた。四月六日、日輪が三つ現れた。

①「毛利家年表」

43 正月十七日西方珍星出、又銀雲人の字の如し

三月廿九日夜中光物不絶、有明の如し
四月六日日輪二体、出頭の如し

正月十七日西の空に珍星が現れた。銀色の雲が人の字のようだった。三月二十九日夜中、絶え間なく光り物がみえ、有明のようだった。四月六日、日輪が三つ現れた。

⑤「石武日記」天保二年一月条

44 一、人之噂ニ、正月十日之夜之月、有明ニ而有之たると専ら申候事、簾星と申、長サ五尺計竿も有之、夜半の頃、高嶺の空より銀杏谷の通りニ見へ申候よし、萩にてハ指月御城山の方ニ当候よし、彗星ハ夜半の頃、陶峠の空の通りニ当り見へ候よし、種々の評説有之

高橋織部事、正月十七日之夜、船中にて船頭見出し候事、海中より手まり程の光り物空へ上り、次第々々ニヒラくくく簾手のやうニ成、終ニ薄雲懸り見へ兼候様見たと申候

人のうわさに、正月十七日夜、有明の月のころであったという。簾星といい、長さ五尺ほどの竿(光の尾)のある星が現れたという。星は夜半のころ、山口の高嶺の方の空から銀杏谷の通りにかけて見えたという。萩では指月山城の山の方に星がみえたという。彗星は夜半ごろには、陶峠の空の上に見えたとみえる。この星について、いろいろと評判が立った。

(宮司の)高橋織部は、正月十七日夜(高橋がこの時に乗船し

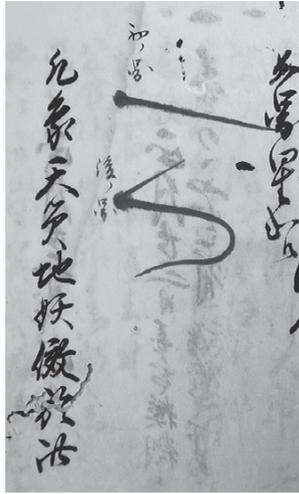
ていた。船中で、最初に船頭がこの星を見つけたという。海中から手毬ほどの大きさの光り物が空へ上がったように見え、そののち、ひらひらと旗のように動き、最後は薄雲がかかって見えなくなってしまうたということである。

⑤「密舟日乗」一月二十一日条

45 一、過ル十七日薄暮、西之方江如図星出ル

初ノ図【図】 後ノ図【図】

凡象天災地妖倣於此



去る一月十七日の薄暮ころ、西の空へ図のような星が現れた。

初めに見えた時の図 のちに見えた時の図

「凡象天災地妖倣於此」(このような星の出現は、天災や不思議な出来事のまえぶれである、との意味か)。

山口県文書館所蔵資料にみえる近世天文関係記事 (山崎)

②「草舎年表」九、四月条

46 本月六日、朝五ツ半時空朧にて雲ル、日の影式ツ見へたりと、
変説有之

(天保 年) 四月六日、朝五ツ半時(午前九時頃)、空が朦朧として曇り、日の影が二つ見えた。(この現象につき) いろいろな説明(解釈)がされた。

* 42・43 にみえる三月の光り物は木星か。富村。

* 42・43 にみえる日輪はハロなどの現象。富村

* 42・45 にみえる彗星は、『天文』文政十三年(天保元年 一八三〇)十二月六日条に「彗星、天市垣に出現」とあり、翌年一月三日にも肉眼で発見されたという一八三〇年第一彗星。

天保四年(一八三三)

⑧「有武日記」五月条

47 一、鳥居之如キ星、曉方近夜半過方七ツ時分、南ノ方二見え候、此星之守り有之、夫を不戴内見候へハ死候由、絵図にて見候而もよく候、是を一説二ハ兜星とも申候、いつれ軍事出来可申杯と申候、肥後と薩摩と出入有之、軍二成杯と申候

鳥居のような(鳥居のような赤色の、の意味か)星が、曉近く、夜半過ぎから七ツ頃(午前四時頃)まで南の空に見えた。この星の加護があり、それを戴かずにこの星をみると死んでしまう

ということだ。絵図で見てもよいという。一説にはこの星を兜星ともいう。いづれ戦さが起きるだろうなどともいった。肥後と薩摩で争いがあり、戦さになると噂した。

⑧ 『有武日記』六月条

48 一、夜之九ツ過方南ノ方ニ乱世星と申、三ツ星之内へ竿を見たる様之星有之、行列之備立なと申候、見ゆる夜も有之、見へざる夜も有之候と噂有之

夜の九ツ過ぎから南の空に「乱世星」といい、夜空の三ツ星のあたりに、竿が見えるような（光の尾を引くような）星が現れた。行列の備立のようだとも言った。この星が見える夜もあれば、見えない夜もあつたと噂した。

天保六年（一八三五）

② 『草舎年表』拾 八月二十三日条

49 八月廿三日、此頃彗星西方ニ見ゆ、尤宵の内、穂先東へさす

このころ、ほうき星が西の空にみえた。宵の内に星の先頭が東へと向かった。

⑤ 『密周日乗』八月二十五日条

50 一、此節兩ニ夜異星西ニ顕わる、彗星に訪仏たり、人々怪哉と称す

このころ、二、三夜にわたって「異星」が西の空に現れた。ほうき星によく似ている。ひとびとは怪しいできごとだと噂した。

④ 『御家年表』

51 八九月彗星乾方出現、中国洪水

八〇九月に「彗星」（ほうき星）が乾の方角に現れた。中国では洪水が起きたという。

* 49〜51は、『天文』八月条に「天彗星、西方に出現、天市垣に入る」とある、一八三五年第二彗星（ハレー彗星）。

天保七年（一八三六）

⑤ 『密周日乗』七月八日条

52 一、異星南に顕わる、世の人兜星と云

一、又東に当つて群星丸く見る、人皆怪哉と云

一、「異星」が南の空に現れた。世の人は「兜星」と言った。

一、東の空に群星が丸く見えた。みなが怪しいことだと言った。

天保十年（一八三九）

⑧ 『有武日記』七月条

53 一、鹿鳴之事触ニ申二ハ、此内以昼之日中より星之見へ候ハ、六月朔日方見へ、豊年星ニ而有之候、秋よりハ痲瘡流行、至而安全と申候

鹿鳴の事触（鹿島神宮の神官によるお告げ）が申すことには、このところ昼日中に星が見えているが、これは六月朔日から見えている現象であり、この星は「豊年星」である。秋からは痲瘡が流行するが、いたって安全である、とのことである。

*金星か。西曆一八三九年九月四日(旧曆七月末)は最大光度で日中に見えやすい。(金君村)。

天保十三年(一八四二)

⑥「浦日記」六月一日条

54一、昨日七ツ過日食、七歩半之事

昨日(六月一日)七ツ過ぎ(午後四時過ぎ頃)日食あり。食甚(も)つとも欠けた割合(百)は七歩半ほどであった。

天保十四年(一八四三)

⑥「浦日記」二月十七日条

55一、從此内夜ニ西ノ方江白氣凶之如立候、何等ノ訳ニ而候哉

不珍敷事ニ而も無之候事

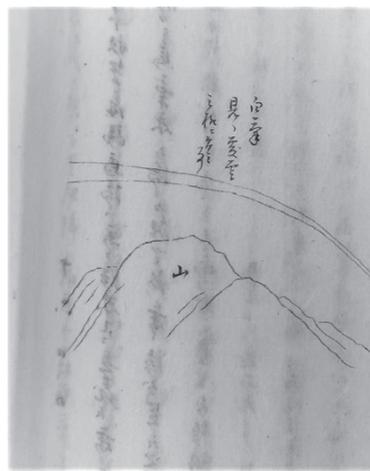
白氣見候処、雲々様ニ有之事

【凶】

このころの夜、西の空に凶のような「白氣」が立つことがあった。どうした理由であろうか。珍しくない出来事でもない。その「白氣」は雲のように見えた。

*このころ浦は給領地伊保庄阿月におり、同地での目撃例と思われる。

修好内夜、西ノ方江白氣凶之如立候、何等ノ訳ニ而候哉



⑥「浦日記」十一月一日条

56一、日食七分、未ノ五刻、下ノ所を懸初メ、申之一刻、左之下に甚敷、申之六刻、上と左之間ニ終る也

(十一月一日)日食。食甚七分。未五刻(午後二時頃)頃から太陽の下の方が欠け初め、申一刻(午後三時過ぎ)には左下の欠け方が著しく、申六刻(午後四時過ぎ)、太陽の上と左の間で食が終る。

嘉永二年(一八四九)

⑥「浦日記」二月一日条

57一、日蝕九分半、五時三歩、右之上よりかけはじめ、四時甚しく、四時八分左の上ニ終る也

(二月一日) 日食。食甚九分半。五ツ時三歩(午前九時頃)、太陽が右の上から欠け初め、四ツ時(午前十時頃)にもっとも食分が激しく、四ツ時八分(正午前)左の上で食が終わる。

嘉永三年(一八五〇)

⑥「浦日記」七月一日条(省記)

58 一、月食六ツ二歩を四歩二終る、二歩計掛候、西国を八見難く候事

(七月一日) 日食。六ツ時二歩から始まり四歩頃に終わる。太陽が一歩ほど欠ける。この日食は西国では見えにくい。

⑥「浦日記」七月一日条(私記)

59 一、日帯太く、六時二歩、二分計かけながら出、六時四分下之右に終る、東国二而八深く、西国にては見へかたかるへし
(七月一日) 日帯食(食状態での日出)が著しく、六ツ時二分(午前六時過ぎ)二歩ほど欠けて太陽が出、六ツ時四分(午前七時頃)に太陽の右の方で食が終わる。東国では食が大きく、西国では見えがたい。

嘉永五年(一八五二)

⑥「浦日記」七月一日条(私記)

60 一、日蝕九分半余、朝四ツ時七歩、右の上よりかけはじめ、昼九時五分甚しく、八時三分、左の上におわり候事

日蝕。食甚九分半。朝四ツ七歩(午前十一時頃)、太陽の右の上か

らかけ始め、昼九ツ五分(午後一時頃)にもっとも食が著しく、八ツ三歩(午後三時前)、左の上で食が終わる。

嘉永六年(一八五三)

①「異録」

61 同七月廿四日頃を西北二当りて珍しき星あらわれ候、常体之星三而上三気上り、俗ニ申尾之如し、当町を見当るに其気凡二尺位イ、尤夜六ツ時を六半頃迄之内、夜々西二より申候、凡六七日位も出テ其後無し

右之図 尤薄し

〔図〕



(嘉永六年七月二十四、五日頃から西北の空に珍しい星が現れた。通常の星の上に「気」が上がったように見え、俗にいう尾のようであった。柳井津町からみえるとその「気(尾)はおよそ二尺ほどの長さであった。夜六ツ時から六ツ半の間(午後六〜七時頃)に西の方に進んでいった。六〜七日ほど現れてその後は見えなくなった。右の(彗星の)図。ただし、(尾の部分の色は)薄かった。

*『天文』六月下旬条に「彗星、西北の空に出現、光芒三尺。七月

太微垣にあり、尾北斗を指す」とある、一八五三年彗星（クリンケルフユス彗星）と思われる。

*図の注記はあるいは「尾薄し」。『天文』掲載の「小梅日記」には「盆後より人々ほうき星出るよし申合、(中略) 如此の星、色は至つてうすく白色にみゆ」とある。

安政三年(一八五六)

⑥「浦日記」九月一日条

62一、日食四分半、朝四時九分を八時二分二終候事

日食あり。食甚は四分半ほど。四ツ九分(正午前)から八ツ二分半(後二時過ぎ)に終わる。

安政五年(一八五八)

⑦「渡辺諱日記」八月十五日条

63一、過る十二日比る彗星出る

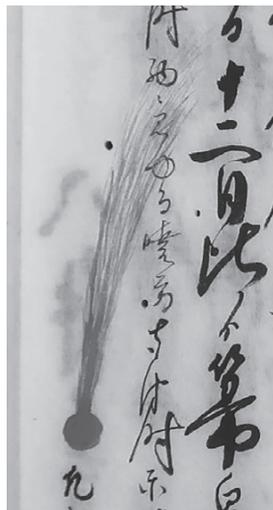
ひやし、暮六ツ時西二見ゆる、暁方七ツ時半時東北ノ間二見ゆる、左之通

【図】 凡式二間位流れ見ゆる

去る八月十二日ころより彗星が現れた。補足。暮六ツ時(午後六時)頃、西の空にみえた。暁のころ七ツ時半(午前五時事)には東北の間にみえた。その姿は左の図のとおり。

およそ一、二間も(彗星の尾が)流れて見えた。

*渡辺諱はこの時江戸におり、同地での目撃記事と思われる。



③「年表」

64 八月十九日頃を長星又ハスイ星共申候、宵二酉ノ方山端二見次第二高く成、南方へ寄、九月十八日頃二消

八月十九日ころ、「長星」または彗星ともいう星が、宵のころ、西の空の山端にみえた。その後、(星の位置は)次第に高くなり、南の方へ進み、九月十八日頃見えなくなった。

⑫「風説書写」

安政五年秋

65 当年珍星、月夜之節見へ兼候所、八月廿日比を評判高くハ、晦日之夕五ツ時、頭ヲ車床へ出、種藏を呼出シ見候所、地之長サなれハ拾間余り見へ候へ共、星の見る所ハ奥長野あたりかと云、云人ハ夫方北へ当り日余地球之岡あたりと云、其余ハ北方・小川あたりの上迄薄白く相見へ、移敷星二而候、是

を俗ニ掃木星、又ハ飛流星とも云、誠珍敷星ニ而候、拙者七十九才ニ而是迄掃木星ニ度位も見候へ共、此度の様成大さ成ハ始而見、古今之珍星と世上皆評判之事

午八月

安政五年秋

この年「珍星」が現れた。月夜では見えにくかったが、八月二十日ごろからこの星が評判となり、晦日の夕五時（午後八時頃）、星の頭が「車床」（地名か）の地で見えた。種蔵（家の泰公人か）を呼び出し観測させたところ、（彗星の尾の長さは）地面での長さで言えば十間ほどにも見え、星をみる場所は（下久原村の）奥長野の辺りがよいといい、ある者はそれより北の樋余地埜の岡あたりがよいといった。そのほかの場所では（下久原村の）北方・小川あたりの上の方まで（彗星の明かるさで）薄白く見えた。思まわしい星である。これを俗に「ほうき星」または「飛流星」ともいい、まことに珍しい星である。自分は七十九才で、これまでほうき星を三回ほど目撃したが、今回のような大きなほうき星は初めてみた。古今の珍星だと世間では評判になった。

午（安政五年）八月

* 63～65は、『天文』安政五年八月上旬条に「大彗星、翼宿に出現、光芒北を指、軫宿に移る」とある一八五八年第六彗星（下ナチ彗星）と思われる。

* 下ナチ彗星に関し県内に残る記録としては、下関市豊前田町の福

仙寺に彗星を描いた図が残る（同寺ウェブサイトを参照）。また、萩博物館では、萩藩士三戸茂内が描いた同彗星の図を所蔵している（同館ウェブサイトを、二〇二二年企画展「ヒストリカルスターズー萩の先人たちが見た星彗星」）。

文久元年（一八六一）

⑦ 渡辺諱日記 五月二十六日

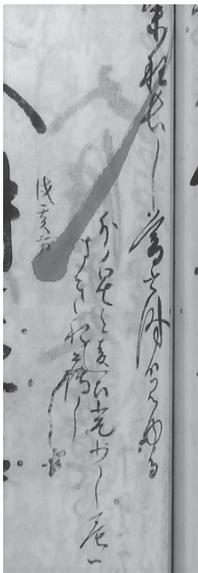
66一、一昨廿四夜成亥之方ニ当り彗星見ゆる、午年之彗星と違ひ尾引余程長し、暮六ツ時を見ゆる

【図】 外ノ星と違ひ、光少し、尾ハさき極薄し

成亥方

一昨日、五月二十四日夜から成亥の方角に彗星がみえた。午年の彗星（安政五年下ナチ彗星）とは異なり、彗星の尾は余程長いものであった。暮六ツ（午後六時）ころからみえた。

他の星と違い光はわずかで、彗星の尾は先に行くほど薄かった。
* 渡辺諱の在所、塩田村での目撃記事と思われる。



⑥ 『浦日記』五月二十五日条

67 一、頃日暮時分る北之方江星杓ツ出、大サ大白星ヲ太ク白輝を中空へ射、曉方東方へ廻り候事

このころ、暮時分から北の空に星がひとつ現れた。大きさは大白星より大きく、白い輝きを空に中に放っていた。曉方に東の空に進んでいった。

※浦は当時伊保庄阿月におり、同地での観測記事と思われる。

* 66・67は、『天文』文久元年五月二十日条に「大彗星、夕の西北の空に出現、光芒天にわたり終夜隠れず、六月に及ぶ」とある、一八六一年第一彗星（今バット彗星）。

* テバット彗星に関する記録（彗星を描いた図）が下関市の福仙寺に残る（同寺ウェブサイトに）。

⑥ 『浦日記』六月一日条

68 一、日食二分、朝四時右之上方掛始、四時四分右之下二甚敷、四時八分下之方二終り候事

日食三步。朝四ツ時（午前十時頃）右の上の方から欠け始め、四ツ時四分頃（十一時前頃）、右の下の方に食甚が大きく、四ツ時八分頃（十二時前頃）、下の辺りで終わる。

文久二年（一八六二）

⑦ 『渡辺諱日記』八月五日条

69 一此間暮六時、戌亥之方二当り彗星見ゆる

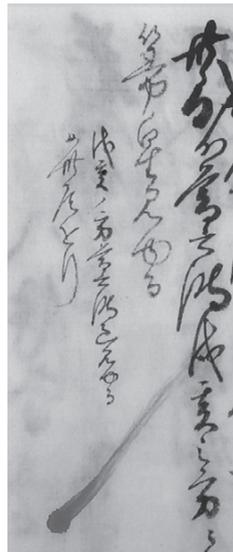
戌亥ノ方暮六時過見ゆる

如此尾を引く

【図】

この間から暮六ツ時（午後六時頃）、戌亥の方角に彗星がみえた。

戌亥の方角に暮六ツ過ぎに見えた彗星は、この図のように尾を引いていた。



* 渡辺諱はこのころ毛利元徳の江戸行に随従し、伊勢国石部（8月4日）、関（5日）、桑名（6日）あたりを通行中。彗星を目撃したのはその辺りと考えられる。

* 『天文』文久二年七月条に「七月十五日流星雨の如く降り、彗星東北の方紫微垣内に出現、八月に及ぶ」とある一八六二年第三彗星（スイフト・タツトル彗星）と思われる。

* スイフト・タツトル彗星に関する記録（彗星を描いた図）が下関市の福仙寺に残る（同寺ウェブサイトに）。

年未詳(幕末)

⑬「彗星之説」

70 彗星之説

去ル七月中、戌亥の方に当り毎夜出給ふ木曜星打続、豊年の吉星なり、俗にほうき星など、名を付候事、大キ成ルあやまりなり、其故ハ昔安部の清明在世の時、此星出現まして、世の人悪星イ出給ふとくやみ歎者少からず、何の故ぞ、清明考所全悪星にあらず、至而吉星なり、能々信する者ハ自然福者と成者少からず、大旨星なり、又星へ祭り候物を問ふ、清明答て、此星火をさらひ給ひ候故、備物少シ、依之左に印備もの

一米 一粟 一稗 一大豆 一小豆

右の五こくヲ清浄にして戌亥の方に御備可被成候、尤此星出現の間八年々豊作ニ而、殊ニ火難・水難の災ひなし、仮令役年に当り候共、此星出現の内ハ少シもたゞりなし、別而戌亥御方ハ身の上に悦ひ少からず、信心し給ふへし、尤何の御年に限らず、御心信の御方、万端悪事も吉事と変シ、子孫長久の基、目出たし〜

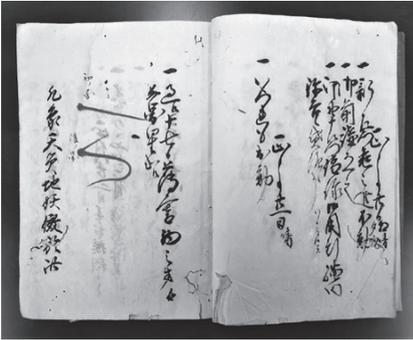
彗星の説

去る七月中から戌亥の方向に毎夜「木曜星」が現れることが続いた。これは豊年を示す「吉星」である。俗にほうき星と名付けることがあ

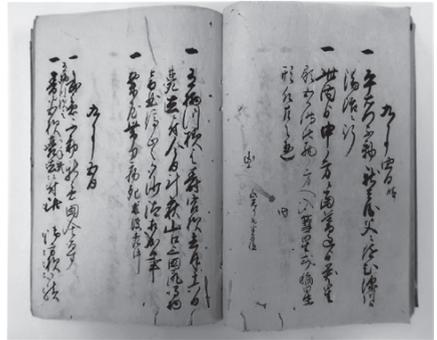
るが、これは大きな間違いである。その理由は、むかし(陰陽師として名高い)安倍晴明が存命の時代、この星が現れ、人々の中に「悪星」が出たといつて嘆き悲しむ者が多かった。それに對し安倍晴明が言うには、どうしてそのようなことを言うのか。自分が考ふるにまったく「悪星」ではない。いたつて「吉星」である。このことを信じる者はきつと幸せとなること疑いない。それを聞いた人が恐縮しつゝこの星を御祭りしたところ、日を経ずして大福長者となるものが少なくなかつた。「大旨星」である。また、(ある人が)この星にお供えする物を尋ねると、清明が答えるには、この星は火を嫌うのでお供えする物の種類は少ない。このため、次にあげる物がお供えすべきものである。

米・粟・稗・大豆・小豆

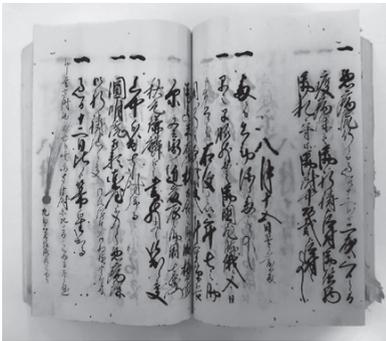
この五穀を清浄にして戌亥の方向にお供えするとよい。この星が現れている間は年々豊作となり、ことに火難・水難などの災いもない。たとえ厄年であつても、この星が見えている間は少しも祟りはない。特に戌亥の方向に居る者は身上に嬉しいことが少なくない。信心すべきである。もつとも何の年に限らず、(この星を)信心する者は万事につけ悪事も吉事に変え、子孫長久のものとなる。めでたしめでたし。



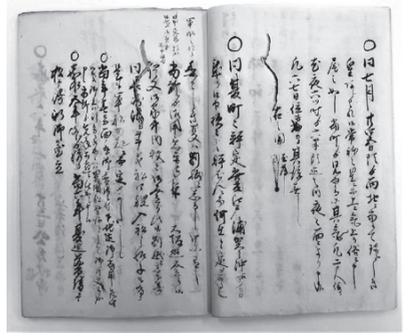
45 「密局日乗」 天保2年(1831)1月21日条



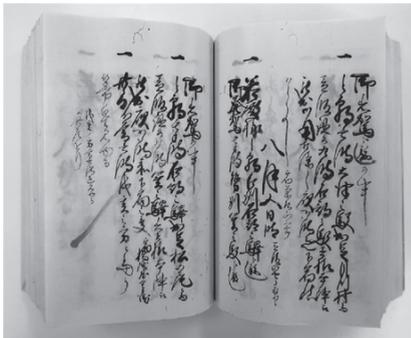
33 「密局日乗」 文化4年(1807)9月4日条



63 「渡辺諄日記」 安政5年(1858)8月15日条



61 「異録」 嘉永6年(1853)7月24~25日



69 「渡辺諄日記」 文久2年(1862)8月5日条



66 「渡辺諄日記」 文久元年(1861)5月26日条